

大学史編纂と開かれた大学

50年史編纂室 谷 本 宗 生

Historiography of the History of the University and Increased University Access to the Community

TANIMOTO Muneo ("50 Years' History of Kanazawa University" Historiographical Office)

For the 21st Century, Japanese Universities should be more open to the Community. This requires that the Historiography of the History of the University also fill the role of an Increased Community Access University.

Historiography of the History of the University should function as a Self-Check on the University well. In addition, the Historiographical News and the University Home-Page should act as a Self-Check on the University's Openness.

Key Words : History of the University
Self-Check
Increased Community Access University
Historiographical News
Home-Page of the University

はじめに

1991年の大学設置基準の大綱化に伴って、教育や研究の実態を社会的に明らかにしようとする大学の自己点検や外部評価が盛んに行われている。例えば、金沢大学でも全学についての『金沢大学 現状と課題』(1993年)を刊行し、『金沢大学 法学部の現状と課題—法学部の発展に向けて—』(1995年)や『金沢大学がん研究所 外部評価報告書』(1996年)など、各部局ごとに自己点検報告書や外部評価報告書を公表している。多くの大学も、同様に現在の教育研究活動と将来に向けての課題という構成のもとに、点検報告書類を作成している。これらの報告書類は、あくまで大学の現状分析に力点を置く傾向が強いために、統計数値やアンケート調査などを主として掲載しており、大学の教育や研究活動への展開や様々な選択肢を有する大学改革への

取り組みなどに対する歴史的な考察はほとんど行われていないという限界がある。

今後、18歳人口の一層の減少化傾向を迎えるに当たって、日本の大学はすべて“開かれた大学”を大学の諸活動を通じて社会的にアピールしていく必要がある。大学史編纂も、その例外とはいえない。新制大学発足50年目を迎え、ますます活発に展開される大学史編纂の在り方もまた、大学の存在根拠や社会的な位置付けなどを検証し、現在の大学が抱える歴史的な諸問題を明示して次世紀へ向けての展望を切り開こうとする姿勢を強く打ち出して行かなければならないであろう。

大学史編纂の流れ

大学史の編纂は、そもそも大学が発足・開学(建学)以来何年目を迎えるに当たって、大学記念事業の一

環として行われる傾向がある。例えば、私立大学ならば、明治期の建学以来百周年目という記念事業で、『東洋大学百年史』全8巻（1988～1995年）や『明治大学百年史』全4巻（1986～1994年）などが刊行されている。国立大学の場合ならば、1999年の新制大学発足50周年に当たって、『金沢大学50年史』や『静岡大学50年史』などが刊行される予定になっている。

旧来の大学史は、その記念誌としての性格から脱することが非常に難しかった。なぜならば、大学史編纂は記念事業の一環として進められ、その経費等も多くは記念事業募金などからまかなわれる現実があるからである。したがって、大学史も（元）教職員や卒業生ら大学関係者の精神的な団結を強化する目的のために、従来自校礼賛的な傾向が強かったことは否定できない。

しかし、1970・80年代以降、『東京大学百年史』全10巻（1984～1987年）の刊行に代表されるように、実証的な歴史研究のアプローチが大学史編纂にも大きく反映されてきている。前述の『東京大学百年史』は、通史3巻・部局史4巻・資料3巻で構成されている。通史（編）の中では、1870・1880年代の官立高等教育機関の動きや帝国大学制度の形成過程などをはじめとして、実証的な分析検討を試みている。資料（編）の中でも、従来あまり用いられることのなかった評議会や各種学内委員会の記録などを掲載している。この他、同時期刊行の『北大百年史』全4巻（1980～1982年）でも、資料（編）2巻として明治期の農学校関係資料を1600頁に渡って復刻し、通史（編）の中では田中彰「札幌農学校と米欧文化」や田中慎一「植民学の成立」などの個人研究論文を掲載している。

特に、『東京大学百年史』編纂に携わった寺崎昌男や中野実、古屋野素材、羽田貴史など近代日本大学史・高等教育史研究者らの活動によって、大学史編纂の実証性はさらに高まっていった。大学政策・制度・財政史など、従来あまり明らかにされていなかった大学行政の実態を新たな資料を用いて、実証的に考察した点は大学史編纂の在り方に大きな影響を与えたといえよう。前述の『東洋大学百年史』全8巻（通史2巻・部局史1巻・資料4巻・年表索引1巻）などを概観してみても、実証性重視の姿勢はよく表れている（寺崎昌男「日本における大学史研究の動向と課題1～大学沿

革史編纂を中心として～」『東洋大学史紀要』4 1986年、中野実「東京大学百年史の編纂過程とその問題点」『東洋大学史紀要』6 1988年、等参照）。

実証性を重視する姿勢は、大学史編纂に付随して、大学史編纂室・資料室から出される研究紀要や資料集などからも強くうかがえる。現況では、私立大学からの刊行数が多いが、国立大学でも東京大学や名古屋大学は大学史編纂後も継続して研究紀要を発行している。内容をみると、近年の紀要は研究の発表のみではなく、新たな資料の紹介やその復刻、聞き取り調査をも含む幅広いものとなっている。例えば、大学紛争でまかれたビラの復刻を行った関西大学や関西学院大学、学徒出陣における出陣者・戦没者の実態分析を行い、名簿等の関係資料を掲載した明治大学や立命館大学が挙げられる。なお、資料集に着目すれば、学内所蔵資料と学外所蔵資料とに大別することが可能である。前者の例としては、立命館大学や神奈川大学の学則・会議録等の集成が挙げられ、後者においては中央大学の国立公文書館・東京都公文書館等の所蔵資料集成が指摘できる。中央大学は、百年史編纂に向けてニュースや研究紀要と合わせて、資料集の刊行を大学史編纂のための重要で基礎的な作業と位置付けている。

大学史編纂の可能性

しかし、今後ますます大学の自己点検や外部評価が盛んに行われていく状況の中で、自校の沿革を実証的に分析する研究志向だけでは、これからの大学史編纂は社会的に意義が問われるのではないかと思われる。確かに、自己点検の側面を有すると以心伝心を期待して大学史編纂後にそれを力説しても、その効果はあるのであろうか。なにゆえに大学史編纂が必要なのか、その効用や意味を社会的に随時説明していくことが、これからより重要であると思われる。学術研究書としての大学史の刊行という形で示すだけでなく、その編纂理念や過程をも併せて明らかにしていくことが必要であろう。

その一つとして、大学史編纂室や資料室などが刊行するニュース類が挙げられる。ニュース類は、研究紀要や資料集などと異なり分量自体も少なく非常に読み

やすい媒体物である。例えば、『中央大学百年史編集ニュース』では資料紹介の他に、大学史関連の文献や全国大学史資料協議会の動向などを随時掲載している。特に、ユニークな記事は、アルバイト学生の森剛志「編集作業に関わって」である（第26号）。森は、4年間の学生生活の中で編集作業に携わって、いかに大学史編集にパソコンによる電算処理が必要か、それに伴う苦労も率直に語っている。さらに、教職員や卒業生だけでなく、在学生にも大学史編集との接点を有する機会の必要性を訴えている。このような実際に編集に従事している者の声を取り上げることも、非常に大切であろう。神戸大学や京都大学などでは、学報や広報紙に大学史のこぼれ話などを紹介する1コーナーを設けている。これらの試みは、学内に対しては大学史編集の機運を高め、学外に対しては大学史の一端を多角的に紹介できる利点がある。さらには、学内外ともに大学史編集室や資料室の活動内容や編集動向を周知できる最大のメリットを有している。

これに加えて、最近急速に行われているのが大学ホームページの開設である。現在進行中の作業であるために、まだけっして十分なものとはいえないが、大学史編集にとっても、これも今後は有効な方策になるものと予想される。例えば、三重大学は『50年史ニュースレター』（第8号まで）を大学附属図書館ホームページ上に掲載している。また、神戸大学の附属図書館ホームページ上には学内刊行物の一覧として『神戸大学史紀要』（第5号まで）の目次が掲載されている。さらに、北海道大学では附属図書館のホームページ上に「マルチメディアでみる北海道と北大のあゆみ」を開設し、その中で「北大120年のあゆみ」として、略年表や沿革資料・沿革写真の一覧を画像も加えて掲載している。

金沢大学でも、編集委員のコメントや教職員OBのヒアリング、「教育宝くじ」（大学創設時の財源確保）といった貴重資料の紹介などを掲載する『金沢大学50年史編集 ニューズレター』を隔月で刊行している。大学グラフ広報紙『月刊 アカササニュース』の1コーナーにも、50年史編集に関わる貴重資料の紹介（写真と解説）を掲載していく予定である。大学のホームページ上にも、50年史編集室（暫定版）を開設し、これからニューズレターなどを随時掲載していきたいと考え

ている。

ニュース類も大学のホームページも、いずれも情報開示という大学の社会的な活動の一環である。学内外に向けて、“開かれた大学”として大学の諸活動をオープンにしていくことが求められる時代に、大学の沿革を大学自身が振り返るという大学史編集も当然その一翼を担う責任があろう。消極的にこれを受けとめるよりも、むしろ積極的に関わっていくべきものと思われる。従来大学史は、記念誌として一部の大学関係者のみを想定して編集される傾向がみられた。しかし、これからの大学史編集はもっと多くの方々を対象とし、自己点検の妥当性あるものに捉え直す必要がある。その観点からすると、京都大学は大学のホームページ上に創立百周年記念事業の計画及び募金要項などを掲載し、次世紀へ向けての大学史編集の一つの展望を示しているといえる。さらに、今後は大学史編集の学内委員会等の議事要綱や、収集資料の一覧（画像データベースも含む）、記念事業のプログラムなど、インターネット活動等を通じて公開する大学もますます増えてくるであろう。

新制大学の50年史

ここで、これから新制大学発足50年目を迎える大学史について少し考えてみよう。大学史編集において、実証的な分析を重視する研究志向と大学の開かれた姿勢との協調的な関係性を模索することが、その際に重要である。例えば、『静大NOW』（静岡大学学報）号外 創立50周年記念誌特集ニュース第1号（平成9年1月16日）をみると、「通史編」（706ページの予定）の目次構成が記されている。それを概観すると、「第1章 静岡大学の成立（45年～50年代）110ページ、第2章 大学「大衆化」時代の静岡大学（60年代）125ページ、第3章 静岡大学の統合・整備（70年代）175ページ、第4章 静岡大学の改革・再編（80年代～90年代）296ページ、第5章 21世紀に向けて 30ページ」とし、特に第5章は「第1節 地域社会と静岡大学、第2節 国際化の中の静岡大学、第3節 自己評価・自己採点」と構成している。従来大学史では、大学の将来展望や課題について検討する傾向はほとんどなかった。こ

の点は、開かれた大学として歴史的な自己点検を行う視点からいって、今後の大学史編纂の特色となろう。

しかし、今後の展望として掲げられる問題点についても、これからの課題とのみ捉えるのではなく、歴史的に検証分析していく姿勢がより重要である。例えば、地域社会と大学との関係性についても、新制大学の発足時から注目される。まず、新制大学の設立資金調達がある。静岡大学の場合、県費2億円の他に「特殊公募」（地域住民の寄付金）1億円の設立資金提供を、大学設立後援会が県下全域で活発に運動した事実が「静岡総合大学設置運動関係資料」に記されている（上記の学報）。金沢大学の発足に関しても、同様な傾向がみられる。地域からの寄付金2,300万円に加えて、「教育宝くじ」を2回実施して1,760万円以上の収益をあげている（『金沢大学十年史』等）。新制大学の設立資金調達は、各県下の地域住民に地域文化の振興や地域産業の活性化という名目のもとに、相応の負担を強いたものといえる。一方で、山口総合大学設置事務局は、昭和24年1月の大学設置委員会の現地調査に対して、宿泊費1人1日2,000円、歓迎費1人1,500円、土産品1人2,000円等で総予算50万円を支払っている。この費用は、山口県が18万円、関係諸市が20万円、各学校が12万円を分担したとされる（山口県庁所蔵「総合大学一件」『山口大学30年史』91頁より）。

さらに、金沢についていえば、金沢城址をめぐる敷地利用の問題も挙げられる。現在、金沢大学は総合移転事業の途上ではあるが、金沢城址を石川県に返還している。新制大学発足時点では、CI & E の教育顧問 W.C. イールズと金沢大学薬学部部長鶴飼貞二が1949年7月9日、金沢城址をめぐる利用について会談している。従来の大学史では、ほとんど用いられることのなかった GHQ 関係資料の一つである CI & E 文書（国立国会図書館憲政資料室所蔵のマイクロフィッシュ）には、その模様が記されている。以下に、その抄訳を示す。

鶴飼博士は、金沢城址の一部を家族交流のための中庭や市民の集会場として使用することについて議論した。イールズは、全区域はすべて大学のために用意されているが、もし暫定的な条件で協定が出来るならば、市民の集会場として使用することとて

も望ましいという判断を示した。

（シートナンバー：CI & E (C) 03661）

市民への城址一部開放も、金沢大学発足時には構想の一つにあった。そもそも、金沢城址を大学の敷地として利用することを第一に石川軍政部が県に返還することを指示した際にも、以下のような条件が提示されていた。大学建設の確かな証拠を示さないならば、金沢市に教育レクリエーション・厚生施設として利用する第一優先権が与えられること、大学が地域住民の利用に応えるような中央図書館・博物館・公会堂を設立するように関係機関と協力すること、などである（「金沢城址に関する軍政隊の覚書」山知外男編『金沢大学創設資料』第1巻）。

金沢城址の利用をめぐるのは、真宗仏教大学の設立も構想されていた。CI & E 文書によると、1947年5月27日、イールズとウエダ（大谷派金沢別院）とマツモト（金沢市立図書館）らは、金沢城址を真宗本願寺の大学設立用地として利用することも検討している。下記に、その抄訳を示す。

金沢城は、信長によって本願寺から奪われ、後に前田一族の支配下に移された。1871年に政府によって接收され、その時から1945年まで帝国陸軍の駐屯隊が使用していた。現在は空いているが、荒廃していて急速に退廃している。この真宗本願寺派の蓮如創立450周年に際して、本願寺宗門はその発祥地で大学を創設したいと望んでいる。マツモトは、金沢市と県職員らがその考えに非常に好意的であると明言した。金沢の軍政部はその件を協議していたが、同様に好意的な方向に傾いている。それは、そのカリキュラムが現在提案されているよりもさらに一般的なものに違いないと信じているからである。CI & E のウイグルスワースとマックレイルは、その提案に明らかに精通しているようである。

（シートナンバー：CI & E (C) 03697）

当時金沢城址をめぐる、様々な利用の試みが検討されていた（「奪い合いの金沢城あと 北陸総合大学乗出す」『北国毎日新聞』昭和22年9月9日、等参照）。

新制大学は、設立資金だけでなく、その敷地についても地域社会からの多大な便宜を受けたことになる。金沢大学が総合移転で金沢城を去った今日、あらためてその歴史的な意味を考えてみる必要があろう。

さらに、戦後初期には金沢市や石川県の他に、隣県である富山県や福井県も加えた北陸総合大学の設立構想が存在した。1946年6月3日、富山・福井の県知事・市長・商工経済会会頭らを加えた「北陸総合大学設置期成同盟会」が設立される。その会の趣意書には、「従来なほざりにされていた裏日本特有の人文と自然とに即した学術研究を振興し、地方文化の啓発に資する」と掲げられている。この同盟会は、北陸総合大学の学問研究の分野について、北海道帝国大学教授理学博士中谷宇吉郎や広島文理科大学教授文学博士斯波六郎などら教育関係者に照会している。その回答によると、北陸特有の工芸美術を振興する芸術学部や、自然環境に適した林学科や水産学科を含めた農学部などの設置が重要と提唱している（『創設資料』第1巻）。しかし、これらの助言には十分に応えることができない形で、1949年5月31日、金沢大学は四高をはじめとする旧制諸学校を基に、法文・教育・理・医・薬・工学部の6学部で発足した。1997年度の金沢大学の入学者1982人に対して、石川・富山・福井の北陸3県の入学者は921人で全体の46.5%を占める（『金沢大学概要』1997年度）。全体に対して半数近くの割合を占める北陸3県の出身学生をみると、確かに教育の機会を地域社会に与えた

点は大いだが、地域社会が必要とする教育や研究を大学は果たして十分提供したのかどうかという問題は残る。この点は、『金沢大学50年史』部局史（編）において、各部局ごとに明らかにされる予定である。

おわりに

大学設置基準の大綱化に伴い、教養教育の改編や大学院の重点化などが問題となっている昨今、大学史編纂は教育や研究の歴史的な実態を明らかにしていくように努めるだけでなく、大学内部の管理運営の在り方なども検討しなければならない。例えば、「大学紛争」時に行われた学内の議論や改革の試みなどを、今だからこそ冷静に振り返る必要があろう。諸資料の収集・整理に努める一方で、現状を打破し次世紀を切り開こうとする強い問題意識を有することがその際に最も重要である。“Plan-Do-See（計画－実行－確認）”という言葉がしばしば自己点検作業で用いられるが、その言葉の真意を示す大学の自治能力の高さを証明するためにも、大学史は開かれた大学の自己点検史として機能すべきものと思われる。

〈付記〉

本稿は、第56回日本教育学会高等教育部会における研究報告（1997年8月29日）に基づいて、加筆修正を加えて作成したものである。